



北里大学同窓会栃木県支部
 ニュース No.6
 2011年5月1日発行

7月10日曜日

支部講演会について (担当: 岸 善明)

北里大学同窓会栃木県支部

演者: 北里大学客員教授 萬田富治先生

支部講演会・懇親会の開催について

「草熟北里八雲牛」

栃木県支部支部長 滝 龍雄

今回ご講演して頂くのは、「草熟北里八雲牛」の開発でよく知られている北里大学客員教授の萬田富治先生です。八雲牧場は、正式名を北里大学獣医学部附属フィールドサイエンスセンター資源循環型畜産研究・実践牧場(八雲牧場)といい、自前の牧草だけで肉牛を育成しています。ここでは除草剤、化学肥料は勿論、配合飼料もまったく使わず、牧草畑には、牛の糞を発酵させた堆肥をまいて牧草を育てます。資源循環型畜産の研究を行っています。

来る7月10日(日)、下記のように宇都宮市のホテル「ニューイタヤ」において、栃木県支部講演会及び懇親会を開催します。多くの方々のご参加をお待ちしています。

支部講演会・懇親会

開催日時 2011年7月10日(日)
 午後4時00分より
 4:00pm 受付開始
 4:30pm 講演会
 5:40pm 懇親会

会場 宇都宮市 ホテル ニューイタヤ



萬田先生は栃木県とも非常に縁が深く現在でもご自宅は那須塩原市です。東北大学大学院を卒業後、昭和47年(1972年)那須塩原市の農林水産省草地試験場研究員になり、平成13年(2001年)には独立行政法人農業技術研究機構畜産草地研究所副所長(草地研究センター長)となりました。翌年4月からは北里大学獣医学部教授として赴任し、附属フィールドサイエンスセンター長となり、現在



住所 〒320-0811 栃木県宇都宮市大通り 2-4-6
 TEL 028-635-5511

に至っています。農水省時代から現場主義をつらぬき、農家の側に立って畜産業を支えてきました。

萬田先生は昨年（2010年）8月8日に放送されたTBS「夢の扉」で、『100%自給自足の牧場で、地球を大事にしたい』と夢を語り、【マイゴール】として、『2020年までに循環型牧場を全国100ヶ所に』を目指しています。

萬田富治先生は、「輸入飼料に依存しない100%牧場産の自給牧草飼料だけで赤身牛肉を生産するシステムを開発した」という業績で、食料自給率アップに向けた国民運動「フード・アクション・ニッポン アワード 2010」研究開発・新技術部門の優秀賞を受賞しました。



「フード・アクション・ニッポン アワード 2010」の受賞式にて（2011年2月1日）中央が萬田先生です

環境重視の牧場で育った肉牛は運動量が豊富なために霜降り肉ではなく、本来の肉らしい赤身の肉です。脂肪が黄色く、臭味が全くないため人気も上がってきています。新潟県南魚沼市にある北里大学保健衛生専門学院。管理栄養学科では、草熟北里八雲牛加工品応用レシピとして目下13種のレシピを発表し、2010年6月に東京・高島屋で開催された第3回小学館『大学は美味しい!!』フェア等にも出品しています。

当日は、萬田先生に「草熟北里八雲牛」開発についての秘話等をお話していただく予定です



（早熟北里八雲牛を用いたビーフカレーなど）

栃木県支部懇親会（担当：塚原 訓子）

萬田先生の講演会に引き続き、栃木県支部懇親会を開催します。支部懇親会には、同窓会本部よりも理事が参加します。支部会員同士の懇親の輪を深めましょう。

尚、懇親会費は5,000円です。受付でお支払い下さい。

お願い

萬田先生講演会、支部懇親会への出欠は、準備の都合もありますので、同封の返信用はがきに**必要事項を記入して6月10日までにご投函下さい。**

尚、会員相互の交流を深めるため、現在視部会ニュースを年2回発行していますが、支部会ニュースの発行以外にe-mailを利用した迅速な情報伝達手段の活用も予定しています。

E-mail address をお持ちの方は返信用はがきに是非、記入をお願いします。

栃木県支部ホーム・ページの立ち上げについて

（担当：天谷 仁一）

栃木県支部では、今期の活動目標として、支部のHPの開設を予定し、担当者を決めてその準備を進めています。出来るだけ早く開設し、支部の活動状況や会員の情報を発信したいと思っています。

ホーム・ページを開設しました暁には、皆様のご協力をお願いします。

会員近況

小野崎 貴子

私は薬学部1983年卒業生の小野崎 卓子（おのぎ たかこ）と申します。出身地は矢板市。現在は埼玉県の新白岡に住んでこちらで薬剤師をしています。10年ほど前に2年間ほど小山市の調剤薬局に勤務しておりましたし、ここ4年ほど継続して自治医大の婦人科に卵巣癌の治療の為お世話になっておりますので、心は栃木県人です。

私は以前から化学療法後の患者の苦しさが理解されていない事に疑問を感じておりました。何もわからなかった1回目の治療後は「私だけ元の身体に戻れない」と自分を責め、大変苦しい日々を送ったりもしました。しかし、癌とつき合っていく中で「発病前と同じになろうと思うのが間違いだ」と考える

ようになりました。と云うより、自分の身体に教えられました。次の再発までどの様な人生を送るかを考えた時、もっと多くの方が副作用に対して知って欲しいと願うようになりまして、自分が発信者の一人となろうと思いました。そんな中、癌患者の会の方から取材を受けてみないかとの話があり、マスコミのかたを紹介されました。昨年よりTVなどでも様々な癌患者についての支援の必要性が取り上げられており、NHKにてドラッグ・ラグの問題が放映されました。

年末には「癌患者の治療費の負担が大きく、生活が成り立たなくなっている。お金がなくなった時＝死を選択する時。」との内容の番組も放映されました。癌でも障害年金の支給対象になることが、新聞でもだいぶ報道されるようになってきているところです。私も12月に障害年金の申請をしましたところ、先日3級で認定されました。

4月からNHKの「あさイチ」という番組(8:15～)で、癌患者の身体的・経済的問題を取り上げていくことになったそうで、番組制作者の方からの取材を受けました。今年は女性特有の癌について定期的に取り上げてゆくそうです。担当の方は私と話をし、日常生活がままならない事に驚かれました。早速一番目の話題として取り上げて下さることになり、現在編集中とのことでした。

21日の放送予定で「ママが癌になったら」という題名らしいです。先週、日常生活そのままを撮影してもらいました。娘たちが私の代わりに家事をしている姿もです。ヨロヨロしている姿が映ってないと嬉しいのですが……

どんな番組になるのかは私も分かりませんが、私の体験として7分間くらいのVTRを編集するつもりだと聞いています。よかったら、見て下さい。一人でも多くの方に副作用の辛さをわかって頂きたいです。

それから、もう一つは朝日新聞です。やはり長期間にわたって癌と向き合っている人達の経済面の苦労や、受けている公的支援についての取材も受けているところでした。掲載は5月か6月です。

自治医大においても、題名はわすれてしまいましたが2月に第1回目の医師と癌患者のセミナーが開催されました。私も参加しまして「化学療法を受けると、マーカーが下がったからと云っても健康だった時と同じようには戻れないのですが、先生方はその点をどう認識なさっていますか？」と質問させていただきました。はっきりとした答えが頂けないのを承知の上での質問ですので、一般的なお答えを頂

いてから「治療開始前に、経験者と話し合う時間を是非設けてほしいです。不安が少なくなると私たちは安心して日常生活を送れます。」とお願いをいたしました。

会終了後、少しDrとお話をする機会があり「先程の提案は検討するに値します。正直我々は副作用の痛みはわからないし、とても副作用のケアはできないのが実情です。」とおっしゃってくださいました。私もこの苦しみは同じ境遇の方しか理解してもらえないと思いますし、まして癌を取り除くのが医師の使命と考えておりますから、それ以上の事は医師には望んでおりません。ですが特に私のようなタキサン系などで化学療法を行いますと、治療後の生活は大変きついものがあります。

今回治療中に教授回診があったのですが、その時教授が「うん、うん、なるほど。3回目ですか。手術も3回受けて。頑張っていますね。大丈夫、貴方ならあと10年でも20年でも頑張れますよ。また癌が見つかったらここに来て治療すればいいんですからね。心配しないで頑張りましょう」と励ましの言葉を掛けて下さいました。

私は「ええ、そうですね。」と顔では笑って答えましたが、心の中では「……そりゃ私だってあと10年は死にたくないけど……でも、この状態で10年を生きるのもツライですよ。(ため息)」とつぶやいていました。重いものは持てないし、どこかに出かけてもすぐに疲れて家に帰りたくなる……。元気なように見えるので普通の仕事をすると、家に帰ってからは疲れて動けない……。今までの3倍も4倍もパワーを絞り出さないと出ないやる気……。自分でも自分の体のコントロールは出来なくなるんです。

私は今、治療後の生活を支援するNPOの設立を願ってしまっていて、その為に出来る限りのことをしたいと取材を受けております。さすがに3回目ともなると、ますます治療費に負担を感じるようになっていきます。また、同じような状況で苦しんでいらっしゃる方もたくさんおります。薬の進歩と共にこのような悩みを持つ方が増えるのは避けられないと思いますので、私の経験は積極的に公開したいと思っております。取材に応じています。これからも、患者側としての発信は続けていきたいと思っております。

私としては、これを一つの足掛かりとして今後なにか形あるものにしていきたいと思っております。日本中が何とも言えない不安を抱えて生活している中ではありますが、関心のある方に見て頂ければ幸いです。

【特集：東日本大震災と大学の対応】

栃木県支部支部長 滝 龍雄
(医療衛生学部微生物学研究室)

3月11日午後2時43分に東北地方太平洋沖で発生したマグニチュード9.0とそれにより惹き起された東北太平洋沿岸の想定外の大津波、更には東京電力福島原子力発電所の放射能汚染事件は、未曾有の大被害を起こし、もうすぐ二ヵ月を迎えようとしている今も、まだまだ復興はおろか大震災の片付けも儘なりません。栃木県でも大きな揺れが続き、場所によっては家屋や家財の被害(家の倒壊、瓦屋根や塀の破損、土台や壁のひび割れ、家財道具や食器類等の転倒や破損など)、停電や水道の断水等もあり、決して安全と言う訳ではありませんでした。支部会員の皆様の中にも被害のあった方もいることでしょう。ここで被災された方々には心よりのお見舞いを申し上げます。

大震災により東北電力、東京電力は発電能力が低下し、計画停電という名の強制停電が始まり、関東地方と東北地方の鉄道は地震による被害と共に電力不足のために運行休止や運航本数の減少等に追い込まれてしまいました。計画停電が何日頃回復するか未定であったため、その影響を回避するために3月21日(春分の日)に開催される予定であった東京有楽町・東京フォーラムでの学位授与式、更には4月6日(水)に予定されていた横浜のパシフィコ横浜での入学式も中止となりました。

◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎

北里大学には岩手県大船渡市三陸町越喜来字鳥頭に海洋生命科学部(旧:水産学部)がありますが、ここも大震災により大きな影響を受けました。相模原地区は大きく長い揺れがあったため、学部ごとに避難訓練に従い、学部ごとに所定の場所に避難しました。海洋生命科学部では学部の校舎は高台にあるため、直接津波の影響は受けなかったものの、学生の住んでいたアパートなどのある浦地区は壊滅的な被害を受けました。

大学では大震災及び津波の発生を受けて、学生・教職員及びその家族の速やかな安全確認を行うとともに、被災された方達の支援のために3月13日未明に第一次の救援物資の輸送を行い、13日午後11時半に現地に着き、食料や燃料を届けました。更に3月14日(月)午後1時、「大学医療チーム」の派遣と合わせて、チャーターバス3台(60人乗り2台、54人乗り1台)に医薬品・生活用品・作業着などの救援物資を積んで相模原キャンパスを出発、3月15日(火)午前0時30分に現地に着

し、折り返してバスで避難していた学生・教職員を白金に無事移動させました。結局合計3回の救援バスにより、合計290名の学生・教職員とその家族を東京に避難させました。

この間の大学の対応状況に打つては、大学のホームページを参照してください。

<http://www.kitasato-u.ac.jp/20110311/index.html>

海洋生命科学部は、校舎の安全確認も終了していませんが、現地在復興してアパート等が整備されない限り、学生や教職員の住居が確保できないため、取り敢えず4年間は海洋生命科学部の講義・実習等を相模原キャンパスで行うことにし、現在、その為のスペース確保に努力しています。偶々、昨年秋に新しい一般教育用の建物(L1号館)に移転したため、解体予定であったクレセント(3階建ての学生食堂棟)が残っていたために、そこを中心にして、各学部からスペースを提供してもらい、ゴールデン・ウィーク明けから講義・実習を始める予定です。4年後以降どうするかは、これから、現地の復興状況を見ながら決めるそうです。

◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎

現地の被災後の状況については、多くの旧水産学部卒業生がインターネットで情報発信をしています。その中には、水産学部8期生の奥山文弥君(東京海洋大学客員教授)が育ててくれた三陸の被災地に行って、青春時代の思い出の地を訪ねたブログを書いていますのでご参照下さい。下の写真は奥山文弥君のブログより転載したものです。津波被害の凄まじさが判るものと思います。



(水産学部8期生奥山文弥君のブログより転載)

奥山文弥君(水産学部8期生、東京海洋大学客員教授)のブログ

<http://f-okuyama.cocolog-nifty.com/blog/2011/04/post-0f25.html>

現在までに安否が確認されていない学園関係者に学生が1名います。その学生の家族が探しに現地に入ったときのことが毎日新聞に掲載されました。何とか見つかってほしいと、祈るだけです。

◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎

2011年4月4日(月) 毎日新聞夕刊

娘が好きだった海 恨めない

岩手県大船渡市にキャンパスがある北里大海洋生命科学部で、ただ一人行方不明となっている瀬尾佳苗さんを東京の家族が捜している。生き物が大好きで、同学部への進学を決めた佳苗さん。大津波があったのがうそのように穏やかな三陸の青い海を前に、両親は「娘が大好きだった海。恨むことはできない」とたたずんだ。4日は佳苗さんの21歳の誕生日だ。【佐藤敬一、蒔田備憲】

3日、津波で一带ががれきの山となった大船渡市三陸町越喜来(おきらい)に、娘を捜して歩く父真治さん(56)、母裕美さん(52)、兄亮介さん(23)の姿があった。震災後、大船渡を訪れたのは2回目になる。



佳苗さんが使っていた品を一つも見つけようと、がれきの中を捜し歩く父真治さん(左)、母裕美さん

同学部は2年生から、相模原市から大船渡市にキャンパスが移る。「海のそばがいい」と佳苗さんが昨春決めたアパートは、今は跡形もなく土台が残るだけ。「どうしてもまずここに来てしまう」と真治さん。裕美さんが「何にもないんだね」と呟いた。

佳苗さんは東京農大一高在学時、馬術部に所属。毎朝4時に起き馬の世話をした。将来は生き物にかかわる仕事に就きたいと考えた。リアス式海岸が広がるキャンパスを見て、北里大進学を決めた。

将来の夢は水族館職員。大学では生物部と茶道部に所属した。裕美さんは『漁師のおじさんが魚をくれた』なんて話をしたり、『自分に合っている街』というほど三陸を気に入っていた」と語る。真治さんも「帰省してもすぐ三陸に帰りがっていた」と話す。

大震災発生5日後の16日夜。ようやく大船渡市に入った両親は、変わり果てた海辺の街に息をのんだ。避難所などを2日間歩き回ったが、佳苗さんは見つからない。娘が乗っていた車がボロボロになって発見され、真治さんは足が震えた。財布は拾得物として交番に届けられ、真治さんと裕美さんが2日、がれきと化した街中でスノーボードも見つけた。

「好きな魚の勉強をしたくて大船渡に行った娘の将来に期待していた。佳苗の使っていた物が一つでも出てくれば、本人がひょこっと出てきてくれると一番いいけれど」と真治さん。裕美さんは言う。

「1%の確率であっても、娘を連れて帰りたい」

◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎

獣医学部の地震の影響

獣医学部 上野 俊治

11日は獣医学部の卒業式で謝恩会開会直後に大きな揺れに襲われました。全員外に避難後すぐ解散となり、学生達は徒歩で自宅へと戻りました。その後大学に行ってみましたが、うちの研究室は研究機材が床に散乱している状態。それでも前回の三陸はるか沖地震の時よりは被害は少なく済みました。

十和田ではその後2日間停電が続きましたが、給水に問題がなかったこと、田舎故に個別のプロパンガスを使用している家が多く、最低限の生活は維持できました。しかしこの頃は、「停電=暖房器具が運転できない」ですので、家の中で厚着をして過ごしました。

本日(3月14日)から大学に出勤しています。午前中に研究室の片付けが終わりましたが、余震が心配で実験器具を床に置き直して暫くは様子見です。

学生達も実家に帰りたいのでしょう。飛行機を予約できた人は帰れますが、それ以外は移動手段がありません。特に被災地出身の学生さんは実家に帰りたいのは山々でしょうけれど、ガソリンも確保できないし、道路も通じているか疑わしく、十和田に留まることしかできないと思います。引っ越しを予定している卒業生もどうしようもない状態で、16日の獣医師国家試験の発表を待っているところです。

そのようなわけで、十和田では通常の生活ができていますが、物流がストップしているので、これからどのような影響が出てくるか不安です。

栃木県支部ニュース原稿募集中

支部ニュースでは、会員の皆様の交流の場として、近況、各種情報などの原稿を募集しています。

送り先: 329-0434 下野市祇園2-24-1 滝 龍雄

e-mail: tatabox@kitasato-u.ac.jp